

# 芦花 瞥見

住 谷 悦 治

中学に入学するまえに、わたくしは芦花の「不如婦」と「寄生木」と「思出の記」と「自然と人生」と、黒法師（横山健堂？）の「想夫憐」を読んだ。「不如婦」と「想夫憐」とを読んだとき、可哀相なその二人の女性のところを想像して、ハラハラと涙をこぼして、書物の頁をよごしながら頁をくって行ったことを覚えている。もちろんこれらの小説を文学として読んだのではない。どこかに実在した事実の物語りとして読んだのであった。ほんとうに泣きながら同情して読んだものだ。そのほか「寄生木」の大著をよんで篠原良平という男らしい青年士官を想い、「思出の記」を読んだときは、菊池慎太郎という九州のたのもしい青年と、その恋人の敏子という女性にあこがれ、「将来もし妻を迎えるのなら敏子のような女性を——」とフト考えたことがあった。敏子という女性の清らかな美しいイメージが何年かつつき、やがて漱石の「虞美人草」の中の宗近君の愛の対象の糸子に移り、さらに漱石の「それから」の三千代に代ってしまったが、中学時代のわたくしの女性のイメージは「思出の記」の敏子によって典型化されていたようである。

芦花のほかには押川春浪の冒険小説に傾倒したが、何といっても

芦花は少年時代に覚えた忘れ得ぬ名前である。もちろん芦花という人はどういう人かについては何も知らなかった。教えてくれる人もいなかった。中学時代に徳富蘇峰と「国民新聞」とを知り、蘇峰と芦花とが兄弟であること、何かで仲たがいで兄弟の縁を切ったとか知らぬとかいうゴシップを耳にし、芦花は、わたくしの郷里上州の伊香保温泉に來泊することがあることや「ほととぎす」という小説が伊香保の山のわらび狩りにはじまることなど想い合わせ芦花についての関心は自然にたかまってきた。小学生のころ、わたくしらの田舎にトットコ節というのが流行したが、その中に「泣いて血を吐くほととぎす、トコトットト」というのがあり、芦花の「不如婦」という小説題名は、浪子が肺結核という不治の病に罹り、良人の武夫を想い、泣いて血を吐くので「ほととぎす」という題名をつけたのだろうなどと思った。しかし「ほととぎす」という鳥が「血を吐く」とは、何んのことだろうということは依然として不可解であった。小学生で物識りの古塩農夫次という友人がいて、「ほととぎすはケッカーと啼くと同時にサット地上を掃くように飛んで行くだろう。だから啼いて地を掃くほととぎすというのさ」と教えてくれ

た。「地を掃く」と「血を吐く」とを通わせたのだらうと、いまでももちろん真相は知らないけれど、何か小学時代からそんな連想を頭に描いて「不如帰」の題名の謎を解いた気でいた。わかったようなわからないような話であるが、芦花という点と必ずこのことから想い出がはじまるのである。

「思出の記」の主人公菊池慎太郎は、上向過程の明治中期の青少年の一つの典型として明朗な立身出世主義で努力奮闘している。まさにかれば、明治元年に生れ、明治時代を通じて華々しく発展した日本にその生をつづけた芦花自身の理想的な反映のようなものではなかったかと思う。

芦花は「維新の渦巻」という一文の中で言っている。「私は明治元年に生れた。日本の維新第一年である。もう四年すると干支の戊辰が一周して私の還暦が来る。……維新第一年五ヶ条の御誓文に立つ日本の志は、着々実行され、またされつつある。我々は『知識を世界に求め』た。『万機公論に決す可く』普選の断行は目睫の間にある。干支が一周して、維新日本は成長した。渦巻が大きくなる時日本の志が大きくならねばならぬ。明治天皇を奉じて、第一維新を我々の先輩は創めた。瑞々しい河陸下を推して我々は第二の維新に舞ひ踊らう。第一維新に三百諸侯は封土を返上した。第二の維新に土地固有は自然である。第一維新は土族の刀を取り上げ、全国を兵にした。而して日清、日露と周囲を払ふに骨折った。第二維新は陸海軍を全廢する。而して後廻しになった一切の内の生活を整理し問題を解決する」との芦花のこうした感激に満ちた發言は、いかにも明治上向過程に生きぬいて来た良識ある日本人に相応わしい内容である。

ただ明るい前途だけが輝いてみえる。資本主義日本の内的矛盾や階級対立の陰惨さが感じられない。ひたすら向上であり前進である。明治時代の発展過程は、青少年の明朗な立身出世主義となって精神的基調を育くみ、天皇を頂点とした全国民をピラミッド式に、階層的に、観念的にも、位階勲等にも国民的序列をつくりあげ一歩でも天皇に近づくことを榮譽とし、努力の根拠とし、立身出世と考えて粉骨碎身する心根を養うにいたった。それは決して民衆の悲惨を踏み合として、他人の貧困と失業との犠牲において自分だけが榮譽と富を得るという意識よりも、むしろ明朗に、上向きのひたすらなる奮励努力が関心事であるというのが特質である。結果として一人の立身成功は、あたかも入学試験の競争のように何人かの不合格者を輩出することになるようなものではあるが、明治時代の立身出世主義は菊池慎太郎の奮励努力に一つの典型がみられるような気がする。それは芦花のころの奥にも深く根ざしていたのではあるまいか。兄蘇峰の優れた才能と華々しい成功にくらべて、芦花は遙かにみすばらしい存在であり、劣等感に陥っていたという芦花自身が告白をしたことがあるようなわけで、心ひそかに優れた兄にまげずに追いつき追いつきの覚悟で努力したものであり、菊池慎太郎の姿は芦花のあるイメージであったと思われるのである。内田魯庵のごときは「思出の記は芦花の自己告白であると確言しているほどである。

内田魯庵によると、芦花は「國民之友」杜時代は「至って謙遜な口数の少ない人だった」し、「忠実な、勤勉な、何事にも疎略でなかつた人」だったそうである。「國民之友」の「泰西思潮欄」で異彩を放った筆致で、トルストイをはじめ、ツルゲネーフ、イブセン、ピョートルソン、ドストエフスキーの名篇大著を涉猟し読破してこれを

紹介し、ゾラ、ドレーデ、フロベールなどフランスの自然派の作も紹介し、ユーゴーなども翻譯したという。いわゆる近代の新興文芸の先驅者の一人であったといえる。しかし日本文学史上でとくに芦花が高く評価されているわけではない。島村抱月の「明治の文学」という論文（「新日本」の「明治聖代号」大正元年八月）には蘇峰の名は出ていないが芦花の名は本文には出ていない。紅葉、露伴、美妙齋、二葉亭、思軒、思案、小波、柳浪、眉山、鵬外、一葉、鏡花、藤村、秋声、春葉等数十人の名は掲げられている。千葉亀雄の「明治大正時代の文学」（「太陽」の「明治大正の文化」昭和二年六月の中の一論文）には、花袋、風葉、宙外、秋声、抱月、春葉、天外、独歩、魯庵等とともに芦花も並列されて「そこで村井絃齋を先進として芦花、幽芳、春雨、春葉等の家庭小説も生れて来た……」と、いつて家庭小説家としての芦花が一言触れられているだけである。このようになわけて日本文学史上では、芦花がとくに高く評価されているわけではない。「不如帰」のごときは文学作品として芸術的価値は問題になっていないけれど、しかし百版数十万部を売りつくし、田舎の隅々——汽車の停車場にさえ速いわたくしの僻村にも一、二冊はあったほどで、それも英、仏その他七八カ国語に翻譯された「ナミコ」は、日本文学史上、他の芸術的作家を圧倒しているのである。魯庵は、「此点に於て芦花君は何人よりも勝つて居る。兄蘇峰君も此世界的名声に於ては芦花君に譲らざるを得ざるであらう」とさえ評しているのである。

## 二

芦花にたいするわたしの最も深い感動は、芦花が第一高等学校で

学生に講演した「謀叛論」の事件である。これは幸徳秋水のいわゆる大逆事件（明治四十三年—四年）のさい秋水以下十二名の死刑に ついての芦花の感想を学生の前で述べた事件であるが、この事件についての詳細は、さきごろ、いまの日本社会党の河上丈太郎氏が一高の学生代表として芦花にその時の講演依頼に行った顛末を一文芸春秋」に書いていたので、それによつてはじめて事件の正確ないきさつが分明了のであるが、このことは芦花のヒューマニズムの熱烈ならわれとして、わたくしのころをばげしく打つたものである。芦花がかつて告白した「人道のための文学」なるものは、たとえ文学の最高目的であるかもしれないが、文学者からみると、人道のための文学などというものはツマラヌものとされがちである。それゆえ、内田魯庵などは、芦花の生前に「芦花君も（トルストイなどと同じやうに）余りにヒューマニティなるものに累せられざらん事を欲する。尤もこんなことは十分御承知の芦花君であるが、唯私の希望をいふだけだ」と忠告のような希望を述べているのである。文学の専門からはともかくとしてわたくしは芦花の小説と、人間としての生活態度とに一貫しているヒューマニティなるものに深くころを打たれざるを得ない。

昭和三年、新潮社から「芦花全集」が発行されることになったさ い、そのころ、まだ若かった私は全集宣伝のために九州福岡、佐賀まで講演旅行をした覚えがある。それはかつて幸徳秋水事件について、紀州新宮の教会から連累者が出たが、その教会の牧師をしていた沖野岩三郎先生が、その後、牧師をやめて、小説家となり（小説「宿命」が新聞小説として一等当選したことを契機として、沖野先生は小説家に転身した）、わたくしの叔父でキリスト教の牧師をし

ていた住谷天来（カーライルの「英雄崇拜論」の訳者）の關係からかわたくしは冲野先生と親しくなったが、芦花と冲野先生とは親しかったらしく、芦花全集の宣伝に関西へ来た冲野先生が、同志社を訪れ、当時やっと教授になったばかりのわたくしを連れて一緒に芦花全集発行宣伝旅行をしたわけであった。わたくしは「社会主義小説家徳富芦花」という題で福岡市公会堂や佐賀市その他で講演をし、小説「黒潮」の話とその中途の攔筆事件と、芦花のトルストイ訪問の話などしたが、当時、社会主義々々々々という言葉がしきりにわたくしの講演に出たので、講演後、その場で神經過敏な冲野先生からヒドク注意されたことを覚えている。（その後、昭和五年六月二十一日から十月二十一日まで、東西兩朝日新聞に連載した冲野岩三郎の小説「闇を貫く」という長篇の主人公杉田哲二という農民組合運動をした青年はわたくしをモデルにしたとかで、わたくしの手紙などがそのまま小説の中に公開されているにはびっくりした。）

ともかくわたくしとしては冲野先生を媒介として芦花に何らかのつながりをもったことは奇しきゆかりとせねばならぬ。わたくしは芦花の一読者として、芦花の作品のうち、第一は「自然と人生」、第二は「思出の記」、第三は「みみずのたはごとく」、を高く評価しているものであるが、これは、もちろん文学の素人の評価であるから権威のある筈はない。ただ少年時代から芦花のまじめな一読者としての「芦花齋見」である。

前にのべたように小学校高等科から中学四年ごろまで、いわば夏目漱石の「虞美人草」と「それから」とを読む以前には、わたくしは押川春浪の小説と芦花の小説に傾倒していたが、芦花のものとしては、「みみずのたはごとく」を最後として、その後はあまり興味

をひかなくなってしまった。それは私の関心が芦花を離れて、漱石や高山樗牛や、トルストイ、ドストエフスキー、ツルゲネーフ、ユゴーなどの代表作に向ったことと、高等学校で土井晩翠からカーライルの *Essays on Goethe* を、登張竹風から、ゲーテのウィルヘルム・マイスターとウェルテルス・ライデンを学んで、文学の世界のみかたが一変したということによると思う。しかし、少年時代の文学的情操を育ててくれた芦花にたいしては、そのころの小説を通してのみ想像した芦花をなつかしく思うだけで、真実の、歴史的存在としての徳富芦花その人については、私の知るころではないし、いま、さほど深い関心をもっているわけではない。しかし芦花がつぎのようなことを書いているのを読むと、やはり芦花が忘れられない生命として、私の心に蘇ってくるのである。

「……私は先づ感謝すべき三人を有つ。三十年來影のごとく身に添ふ私の妻。彼女の名は『愛』である。凛々しい信仰で遠ながら私に力づけて下さった内村鑑三先生。徹底した無抵抗で私を安心させてくれる賀川豊彦後生。礼を言ひたいにも幽明を隔つるが多い中にそれを現在に有つは何と云ふ感謝であらう。」（私と平和より）

「私は弱虫のくせに、否弱虫の故に、疴癩持ちで、相手次第でよく暴力に訴へた。耶蘇を信じ洗札を受けて四十年、わざわざ露西亞にトルストイを訪ねて二十年、五十七才といふ今年まで、わるいと思ひながら中々暴力が脱げきれなかった。」

日清戦争には支那を憎んだ。日露戦争には露西亞が憎かった。独逸征伐にはカイゼルが憎かった。日本がそれ等と戦ふ時、私の心は戦ひの直中<sup>（直中）</sup>にあった。私が憎む時日本が戦ったとも云へる。やっと今度といふ今度、日米の齟齬に際して、私は初めてはつき

りと非戦平和の旗を揚げる。それは永劫に掲げる私の旗である」  
〔私と平和より〕。

「人類を二分して、半は女。男がさんざ揉んだ掲句は、いよいよ女の出幕になった。百の耶蘇、千の釈迦、万の孔子が地団太踏んでも、男ばかりで世界の平和が来よう筈はない。闘争は男の癖だ。女だ。女が平和を来すのだ。女が平和に眼ざめぬ限り、戦争は決して止まない。」

女が平和を来すといふのは、女が男をはなれて別に平和の女護が島をつくるの謂ではない。女あつての男、男あつての女だ。女が男を手馴づけ、男を弄び、男を殺し、男を征服し、男を女にしてさふのが、平和の世界ではない。女が真に女であり本当に男を愛する事によって男を自重させ他重させ、男性の自然を尊び解する事によって自然に各自生命の軌道を分ち、軋りやすい競争の機関に油を注ぎ、其氣を平らげ、其焰を和らげ、無理なく生命といふ生命を洗滌とした驕喜の合奏に導く事によって、斯くて生命ある平和を来すのだ。本然の女は自づから其道を知る。それは活ける女の仕事だ。高慢な女、鄙吝な女、しびれた女、浅薄な女、無知な女、不自然な女、愛のない女は、男を或は狂犬にし或は剥製の天使にする事は出来るかも知れぬが、断じて平和の新天新地を生む事は出来ない。」  
〔大正十三年、芦花「百日紅の盛りを眺めて」の一節〕。